

## 幼児のしつけ形成過程にみるジェンダー再生産の装置 - 保護者を対象にした調査をもとに -

The equipment of gender reproduction seen in the process of forming child upbringing  
- Based on the investigation for guardians -

田中 亨胤\* 佐藤 和順\*\*  
Yukitane TANAKA Kazuyuki SATO

The process of forming gender at home is specifically performed under the name of "upbringing" in the interaction of parents as a representative of a family with their children. The purpose of this investigation is to search for the measure for the view of sexual role of a guardian who has a big influence on forming child's gender at home, and we did a careful comparative review of the various factors in an upbringing scene. This research shows the following tendency. The parents who have a high traditional view of sexual role expect a male to succeed in the occupation in a public domain, and expect a woman to play a role of mother and wife in a private domain. And they tend to accept gender rather than other parents. Namely, they have a tendency to approve of the existence of "boy-likeness", "girl-likeness". To approve of the peculiarity of "boy-likeness" or "girl-likeness" is the same as to approve of gender that has cultural and social sex differences. Parents who have an internalized traditional view of sexual role has a clear image model called "boy-likeness" or "girl likeness". Therefore, they are bringing up their children based on the idea of "boy-likeness" or "girl-likeness". The act of upbringing is done in relation to the measure for the view of sexual role of parents. Parents who make much of an internalized traditional view of sexual role ask their children for upbringing based on a child's gender called "boy-likeness" or "girl-likeness". It is considered that it also affects forming and reproducing child gender. The parents who have an internalized traditional view of sexual role are more concerned with reproduction of gender than other parents. In a general understanding of the word of "upbringing", it contains the meaning of teaching a role of gender over a long period. Because upbringing during infancy gives a big influence on forming gender, it is thought to be important.

キーワード：しつけ 保護者 ジェンダー 性役割観尺度

Key words : upbringing, parents, gender, the measure for the view of sexual role

### I 問題の所在

1970年代以降の教育研究においては、学校は文化平等という傾向よりも、むしろそれに反する文化的差異の構造化、およびそれによる社会的地位の再生産の傾向が強いという議論が盛んにされるようになった。社会的文化的性差であるジェンダーの再生産に関しても同様であり、木村（1999）<sup>(1)</sup>や森（1995）<sup>(2)</sup>が指摘するように幼稚園・保育所をはじめとする学校制度の中でジェンダーの再生産が行われていることは教育社会学の分野では自明のこととなっている。

家庭は学校以上に、現代社会における人的資本の側面から社会を再生産する重要な機関であり、当該社会の生産力に応じた能力と資質を有した労働力を養成し、当該社会の生産関係を反映した社会的関係を形成する。ジェンダーに関しても、幼稚園の入園初日から、子どもは男の子、女の子という区別を間違いなくしていることから、それ以前の家庭内でジェンダーがある程度作れられることは想像に難くない。われわれが通常家族の中に生

まれ、両親やきょうだいをはじめとする他者との相互作用の中で生活・成長することを考えれば、ジェンダーの形成に関しても家族という要因が大きな意味を有していることは間違いないであろう。家族の中でも特に、保護者が子どものジェンダー形成に最も関わっていることは自明のことである。保護者のイデオロギーや態度が、子どものジェンダー形成にも影響を与えることは、容易に想像できる。具体的には、どのようなメカニズムで家庭におけるジェンダーは形成されているのであろうか。しつけという行為が、ジェンダー形成に大きな影響を与えているのではないだろうか。

しつけとは「一般に、子供に、日常生活における行動様式ないしは生活慣習の型を身につけさせることをいい、おもに家庭での初期の教育」<sup>(3)</sup>をさすものである。しつけと呼ばれる行為が、基本的には幼年期における第一次社会化の重要な部分であると考えるならば、しつけとジェンダー形成の関係をとらえることは重要な意味を有する。家庭生活における、保護者の子どもに対する直

\* 兵庫教育大学第1部（幼年教育講座）

\*\* 兵庫教育大学連合大学院（学校教育実践学専攻）

平成13年10月22日受理

接的な態度や親子関係のあり方が子どものジェンダーの形成に影響を及ぼすと考えられるのである。「男の子」には、青い服を与え、飛行機や自動車のおもちゃを与える。一方、「女の子」には赤い服やお人形遊び道具として与える。このような保護者の思いや行為が子ども達が「男の子らしさ」「女の子らしさ」を身につけていく最も重要なメカニズムになっていくのである。男の子は「男の子らしく」、女の子は「女の子らしく」、子どもはしつけられていくのである。男性も女性も本人が抱く性役割意識には、子どもの頃に家庭で受けたしつけの影響が強く関係していると考えられる。

しつけに関してわが国の歴史を振り返ってみると、伝統的な性役割のしつけは社会構造に対してかなり明確に対応してきた。森（1989）によると、江戸時代の武家社会では、儒教がその思想の中軸をなし、家父長制度を通して封建主義的社会秩序を維持するためにイエの責任のもと、男女完全分離のもとでしつけが行われていた。これは男児には政治や軍事の職分を、女児には奥方として家を治めさせることをそれぞれ目的とした社会化とみなすことができる。男は外、女は内という性別分業規範ならびに性役割のしつけ規範は、わが国ではこの武家家族モデルから派生したと考えられる。支配者階級の武家社会に対して、被支配者階級である庶民社会においては、儒教の影響があったことはみとめられるが、それ以上に主として生産労働の維持のため、男児は将来の働き手として、女児は家事・育児の担い手および補助的生産労働者として、社会化することが目的とされた。いずれにしても産む性、産まざる性という生物学的根拠の上にイデオロギー的文化的社会的な、あるいは労働関係的な性別分業が打ち立てられ、それぞれの性の地位に応じた望ましい所属性が社会的に強化・推奨されていった。その共有化された言明様式がいわゆる「男らしさ」「女らしさ」になっていたのである。前近代の社会においては、性役割のしつけは異論のないフォーマル・カリキュラム（formal curriculum）として重要な意味を有していた。性役割の面から、近代化を定義づけるとするとならば、フォーマル・カリキュラムが個人主義の名のもとにその正当化の根拠を失いつつ、他方で産業社会の要請によって形づくられる近代家族・近代学校のなかで再編成されていくプロセスと見ることができるであろう<sup>(4)</sup>。

以上のように、家庭におけるジェンダー形成過程は保護者を代表とする家族と子どもの相互作用において、具体的には、しつけという名目で行われている。しつけというものが、基本的には幼年期における第一次社会化の重要な部分であることからすれば、しつけとジェンダーの関連は注目しておかなければならぬであろう。また、インフォーマルなものとして子ども達に伝えられていくということにも、学校における隠れたカリキュラムと同

様に、注意を要するのである。ただし、一般的にしつけという基本的な価値・規範、行動様式に関する意図的社会化は、性別に付随する事柄についてみれば、幼年に限ったことではないことも事実である。しつけという葉の一般的な理解の中には、かなり長期にわたる性役の教え込みという意味合いが含まれていることにも注する必要はあると思われる。

## II 研究の目的

家庭におけるジェンダーの再生産は、学校における育実践に二つの構造があるとする文脈と同様に、二重造により成り立っていると考えられる。一つは表層構造であり、容易に観察することのできるものである。他は深層構造であり、容易に観察することができないものである。表層構造は保護者の言葉かけやしつけといつ家庭における教育環境ともいいうべきものであり、目に入るストラテジーとして捉えることができる。一方、層構造は表層構造を構築するものであり、親の教育観などの目に見えない考え方やイデオロギー等がこれにある。とかく教育研究においても、教育研究の特徴は表構造において表出するので表層構造のみを研究対象とがちである。有地（2000）<sup>(5)</sup>、清水（1983）<sup>(6)</sup>らに代表される家庭におけるしつけ研究も多くあるが、両構造関連づける研究は少ないようと思われる。保護者のイデオロギーあるいはジェンダーに関する考え方が、どのような過程でジェンダー再生産として表出するかを取りった先行研究は見受けられない。二つの構造を関連づてしつけを捉えることは、しつけ喪失の時代といわれ久しい今日において、必要な態度であると考えられる。層構造と深層構造は相互に関連するものであり、深層造にこそイデオロギー等のしつけの本質を見ることがある。

本研究は、家庭におけるジェンダーの再生産の多重造の深層構造を成すものとして保護者の性役割観に着をする。性役割観は「男は仕事、女は家庭」的な性による役割規範の違いに注目をするものである。それを尺度することにより、単に性差による社会的行動のありの違いを表出させるだけでなく、家庭におけるしつけはじめとする教育実践のイデオロギーとしても捉えることが可能になる。性役割観は、結婚・子育てにより仕事を継続するかしないか、両立する場合にもどちらを優先行うかといったように、ライフスタイル等にも反されるものである。

そして表層構造としては、保護者のしつけ方法、まことにしつけ方法の変化、保護者は子どもの性差によって、しつけの方法を変えるのかということに着目する。保護者が「男の子らしさ」「女の子らしさ」をどのように子どもに求めるのかをもって、家庭における教

実践の表層構造とする。保護者の性役割観の違いが、保護者の子どもの性別によるしつけ方法の変化、ジェンダーに関する認識といかなる関係にあるのかを明らかにすることを本研究の目的とする。このような研究態度は、ジェンダー再生産に関わる表層構造と深層構造との関連を捉えるものであり、家庭におけるしつけをはじめとする教育の改善にも有用であると考える。

保護者のしつけに関する意識は、制度化された自明の理としてのイデオロギーであったり、潜在化された無意識のイデオロギーであったりする。こうした保護者のイデオロギーがその他の家庭教育における実践同様、どの

ようじにジェンダーの再生産に影響を及ぼしているかを明確にすることが、家庭における教育実践において大きな意味を有する。

### III 研究の方法

対象：広島県内の私立幼稚園に子どもを通わせる保護者（3園・555名）  
 方法：質問紙調査  
 時期：2001年7月中旬  
 サンプルの概要：表1、表2、表3

表1：質問紙の配布と回収状況

調査の概要	対象園	A幼稚園	B幼稚園	C幼稚園	合計
設置者別	学校法人立	学校法人立	学校法人立		
配付数	299	168	153	620	
回収数	287	153	115	555	
回収率（%）	96.0	91.1	75.2	89.5	

表2：回答者の性別

	男性（父）	女性（母）	合計
人数（人）	18	537	555
割合（%）	3.2	96.8	100.0

表3：回答者の年齢

年齢（歳）	10代	～24	～29	～34	～39	～44	合計
人数（人）	5	97	264	153	30	6	555
割合（%）	0.9	17.5	47.6	27.6	5.4	1.1	100.0

### IV 調査の結果と分析

#### 1) しつけ研究の意義

学級崩壊や青少年の関係する事件報道がなされる度に、今日の教育は、危機的状況にあるといわれる。それは多用な要因が絡み合って生じていると思われる。保護者はその要因は何にあると考えているのか、ということを明らかにするために「最近、子どもの万引きやいじめ

などの問題が増えていますが、あなたはその原因はどこにあると思いますか」という質問を行った。その結果が表4である。

「家庭のしつけ」が現在の社会の荒廃原因であると考えているものは63.8%と、「社会やものの考え方」、「子ども自身」等と比するとかなり高い割合である。家庭における子どものしつけの弱体化が、今日の教育的危機の基盤をなしていると考える保護者が多いということが分かる。現代の教育危機のもっとも基底的な要因として、家庭の教育力の弱体化、とりわけ、しつけの弱体化が指摘されているのである。「しつけの喪失」「しつけの危機」等はそれを象徴する言葉であると思われる。

しつけの重要性については、保護者はどのように考えているのかということを明らかにするために「子どもの成長の過程においてしつけは重要であると思いますか」という設問を行った。その結果が表5である。

表4：荒廃原因

項目	度数（人）	割合
家庭のしつけ	354	63.8
社会やものの考え方	108	19.5
子ども自身	30	5.4
テレビやマンガの影響	28	4.9
学校の教育	23	4.3
その他	12	2.2
合計	555	100.0

表5：しつけの重要性

I	II	III	IV	V	合計
89.2(495)	10.3(57)	0.5(3)	0.0(0)	0.0(0)	100.0(555)

※ I 重要である II ある程度重要 III どちらでもない IV あまり重要でない V 重要でない

重要であると考えているものは89.2%であり、ある程度重要であると考えているもの10.3%と合計するとほとんどの保護者が、子ども期におけるしつけを重要な教育方法であると考えている。このことからも、家庭における教育の中心を担うしつけを取り上げる意味がある。しつけは社会を健全に機能させるために不可欠なものであり、その重要性を保護者は感じ取っているのである。またしつけが、性役割の教え込みという側面を有するならば、しつけとジェンダーの再生産との関係を検証する意味がここに見出せる。

## 2) 性役割観尺度の作成

家庭内で子どものジェンダー形成に大きな影響を与える保護者の性役割観尺度をもとめ、しつけ場面における種々の要因との比較検討を行うにあたり、保護者が内面化していると思われる性役割観を、中西（1998）の先行研究に基づき、公的および私的領域における男女の役割分担についての一般認識を尋ねる五つの質問項目を合成して作成した質問紙を用いて尺度化した<sup>(7)</sup>。

具体的には「女性はいざという時には仕事よりも家庭を優先したほうがよい」「妻が外で働き、夫が家事・育児を行う夫婦が増えてもよい」「家族の重要な決定は、最終的には夫がするほうがよい」「実力が同じでも、女性より男性のほうが上司に向いている」「今まで男性に向くといわれた職業でも、女性はどんどん進出したほうがよい」等の質問に、「とてもそう思う」「ややそう思う」「どちらでもない」「あまりそう思わない」「まったくそう思わない」等の選択肢を設け、各選択肢に得点を付した。

以上の尺度を用いて有効回答者555人の性役割観スコアを算出し、その分布状況から得点の高いものから約40%を伝統的な性役割観を内面化しているもの、反対に得点の低いものから約40%を流動的な性役割観を内面化しているもの、残りの約20%を中間的な性役割観を内面

化しているものに分類した。伝統的性役割観を内面化するもの（以下、伝統的）とは、男性には公的領域における職業達成を期待し、女性には私的領域における母役割・妻役割を期待する傾向の高いものである。流動的性役割観を内面化するもの（以下、流動的）とは、逆にその傾向の低いものである。中間的な性役割観を内面化するもの（以下、中間的）は、両者の中間に位置するものである。その結果は表6の通りである（表中の単位は%，（）内は人数。以下同じ）。

伝統的性役割観を内面化しているものはジェンダーを容認する傾向が強く、男女の差を当然のものであると考え、性差による行動様式や思考様式、生活のあり方の差異を自然なものとして受けとめ、性差別等のジェンダーに関する問題意識は低い傾向にあると考えられる。一方、流動的性役割観を内面化するものは、伝統的性役割観を内面化するものよりジェンダーを否定的に捉え、男女が同じスタンスに立つことが重要であり、性差別やジェンダーに関する問題意識も高い傾向にあると考えられる。中間的な性役割観を内面化するものは、両者の中間に位置するものと捉えることができる。

## 3) 性役割観尺度と客体としてのしつけ

しつけは、「しつけを行うもの」と「しつけを受けるもの」との両者によって成り立つ。本研究では、「しつけを行う」方をしつけの主体ととらえ、「しつけを受ける」方をしつけの客体としてとらえる。

しつけの再生産という観点から、保護者自身が子どもの頃、受けたしつけと性役割観尺度との関係を調べる。まず、客体としての保護者のしつけの厳しさについて質問を行った。

「あなた自身子ども時代、厳しくしつけられましたか」という設問に対する回答は、表7に示す通りである。

厳しかったと回答しているものは、伝統的性役割観を内面化しているもので69.4%，中間的なもので62.1%で、

表6：性役割観尺度による分類

伝統的	39.5 (219)
中間的	20.0 (111)
流動的	40.5 (225)

※伝統的性役割得点：10～1

男性には公的領域における職業達成を期待し、女性には私的領域における母役割・妻役割を期待する傾向の高いもの

※中間的性役割得点：0～-1

伝統的性役割観を内面化しているものと流動的性役割観を内面化しているものとの間に位置するもの

※流動的性役割得点：-2～-10

男性には公的領域における職業達成を期待し、女性には私的領域における母役割・妻役割を期待する傾向の低いもの

流動的性役割観を内面化しているものでは65.8%であった。中間的性役割観を内面化するものにどちらでもないと回答するものの割合がやや多い傾向は見られるが、性役割観尺度と保護者自身のしつけの間には明確な差異や一定の傾向は見られず、性役割観尺度と保護者自身が子どもの頃に受けたしつけとの間には関係性がないと考えられる。

#### 4) 性役割観尺度と主体としてのしつけ

同じくしつけの再生産という観点から、性役割観尺度としつけを行う主体としてのわが子へのしつけの厳しさとの関係を調べるために、主体としての、子どもへのしつけの厳しさについて質問を行った。

「あなた自身はわが子のしつけに関して、厳しいと思われますか」という設問に対する回答は表8に示す通りである。

厳しいと思うと回答しているものは、伝統的性役割観を内面化しているもので65.8%、中間的なもので70.3%、流動的性役割観を内面化しているものでは60.4%であった。流動的性役割観を内面化しているものに厳しくないと回答するものの割合が多く見られるが、伝統的性役割観を内面化しているもの、中間的性役割観を内面化しているもの、流動的性役割観を内面化しているもの間に、顕著な差異や一定の傾向は見られなかった。性役割観尺度とわが子へのしつけとの間には関係性がないと考えられる。

以上の結果から、性役割観尺度と保護者自身が客体となって受けたしつけ、保護者自身が主体となって行うしつけの間には、顕著な差異や一定の傾向は見られなかっ

た。しつけが長期にわたる性役割の教え込みという機能を有するものならば、直接保護者から厳しいしつけを受けたものが、伝統的な性役割観を内面化するという傾向にある、もしくは伝統的な性役割観を内面化しているものは、わが子のしつけに関しても厳しいのではないかとの仮説をたてていた。しかし今回の調査からは、伝統的性役割観を内面化するものが、過去、自分の保護者から厳しくしつけられたと感じている、もしくは、流動的性役割観を内面化しているものは、わが子のしつけに関して厳しくないと感じているという傾向等は見ることができなかった。性役割観と客体もしくは、主体となって関わるしつけとの間には、顕著な関係はないと考えられる。

しかし、しつけの再生産という観点から、同一個人におけるしつけの主体と客体の間には何らかの関係があるのではないかと考えられる。そこで「あなた自身子ども時代、厳しくしつけられましたか」という客体としてのしつけと、「あなた自身はわが子のしつけに関して、厳しいと思われますか」という主体としてのしつけの間の関連性を調べた。その結果が、表9である。

厳しくしつけられたと感じている保護者の78.0%が、わが子のしつけに関しても厳しいと感じており、どちらでもない、厳しくなかったと感じている保護者に比して高い傾向を示した。また反対に、しつけは厳しくなかったと感じている保護者の30.2%が、自分の子どものしつけに関しても厳しくないと考えている。これは、厳しかった、どちらでもないと感じている保護者に比して高い傾向を示した。

以上のことから、子ども時代に厳しくしつけられたものは、保護者になったときには子どもを厳しくしつける

表7：性役割観尺度と客体としてのしつけについてのクロス表

	厳しかった	どちらでもない	厳しくなった	合計
伝統的	69.4(152)	11.4(25)	19.2(25)	100.0(219)
中間的	62.1(69)	29.7(33)	8.2(9)	100.0(111)
流動的	65.8(148)	18.7(42)	15.5(35)	100.0(225)

表8：性役割観尺度と主体としてのしつけについてのクロス表

	厳しい	どちらでもない	厳しくない	合計
伝統的	65.8(144)	24.7(54)	9.5(21)	100.0(219)
中間的	70.3(78)	24.3(27)	5.4(6)	100.0(111)
流動的	60.4(136)	20.4(46)	19.2(43)	100.0(225)

表9：主体と客体関係のしつけについてのクロス表

主体として 客体として	厳しい	どちらでもない	厳しくない	合計
厳しかった	78.0(288)	14.1(52)	7.9(29)	100.0(369)
どちらでもない	31.0(31)	54.0(54)	15.0(15)	100.0(100)
厳しくなかった	45.4(39)	24.4(21)	30.2(26)	100.0(86)

傾向があることが明らかになった。しつけの客体として保護者から厳しくしつけられたものと、しつけの主体としての子どものしつけに関しては、関連性があると思われる。厳しくしつけられたものは、わが子を厳しくしつける傾向があるのである。しつけは、厳しいしつけを受けたものが、子どもにも厳しいしつけをするという意味での再生産が見られる。

ただ「あなた自身子ども時代、厳しくしつけられましたか」「あなた自身はわが子のしつけに関して、厳しいと思われますか」という、これらの質問は非常に主観的な判断を要求する設問であり、判断基準の設定が難しい。このことに関しては、より客観的な判断基準を明示することが今後の研究の課題の一つになると考える。

### 5) 性役割観尺度とジェンダー概念

中西（1998）によると、男女の性差による教育期待の違いがあるという指摘がある<sup>(8)</sup>。同様に、しつけにも性差による期待される行動の違いは存在するのではないだろうか。しつけ場面を考える時に「男の子だから泣くのではない」「女の子のだから行儀よくしなさい」といった言葉が聞かれる。性差により求められるしつけは異なるのである。保護者が子どもをしつける際には、モデルとなる「男の子らしさ」「女の子らしさ」というものが存在するのではないだろうか。保護者が有する理想としての「男の子」「女の子」に近づくようにしつけは行われるのではないだろうかと考える。

そこで『「男の子らしさ」「女の子らしさ」というものがあると思いますか』という設問を行った。その結果は表10に示す通りである。

分析方法はクロス集計を行い、検定には $\chi^2$ （カイ<sup>2</sup>）2

乗検定を利用した。分析のための算出はHALBAU（現代数学社）およびSPSS（SPSS Inc.）を用いた。それぞれのソフトで検定を行った結果、ソフト間での検定値に誤差はほとんど認められなかった。そこで、本研究ではSPSSの出力結果を用いることとする（以下、統計処理に関しては同様）。

伝統的性役割観を内面化しているものは83.1%、中間的なもので73.9%が、流動的性役割観を内面化しているものは64.0%が「男の子らしさ」「女の子らしさ」というものがあると考えているようである。そして、性役割観尺度と「男の子らしさ」「女の子らしさ」があると考えることのあいだには明らかな有意差が見られた。伝統的性役割観を内面化しているものは、中間的性役割観を内面化しているもの、流動的性役割観を内面化しているものに比して、「男の子らしさ」「女の子らしさ」の違いがあると認識しているのである。

それでは、具体的にはどのような特性を「男の子らしさ」「女の子らしさ」として考えているのであろうか。

続いて『あなたの思う「男の子らしさ」「女の子らしさ」とは何ですか』という設問を自由記述にて行った。以下、設問に対して回答のあった「男の子らしさ」「女の子らしさ」と思われる代表的ものを示したものが表11である。

上述のような「男の子らしさ」「女の子らしさ」は生物学的な違いによるものというより、文化的・社会的な性差によるものではないかと考えられる。つまりセクシヤリティによるものではなく、ジェンダーに基づくものではないかと考えられる。

伝統的性役割観を内面化しているもの、中間的役割観を内面化しているもの、流動的性役割観を内面化してい

表10：性役割観尺度と「らしさ」についてのクロス表

	ある	ない	合計
伝統的	83.1(182)	16.9(37)	100.0(219)
中間的	73.9 (82)	26.1(29)	100.0(111)
流動的	64.0(144)	36.0(81)	100.0(225)
$\chi^2 = 23.192$ df=2 $p < 0.001$			

表11：「男のらしさ」「女のらしさ」

男らしさ	力強い (a)・たくましさ (a)・活発 (a)・大胆さ (a)・弱者(女の子)を守る (b)・言葉遣い (c)・自動車やヒーローが好き (d)・ズボンをはく (d)・体つき (がっかり) (d)・耐える (e)・我慢ができる (e)・自我が強い (f)
女らしさ	優しさ (A)・小さな気配り (A)・奥ゆかしさ (B)・髪型等の身なりに気をつける(B)・恥じらい (B)・言葉遣い(C)・口が達者 (C)・お人形遊びが好き (D)・スカートをはく (D)・母性本能 (D)・体つき (やわらかい感じ) (D)・料理が好き (E)・まじめ (F)

\*a, A 等のアルファベットは報告者が、「男の子らしさ」「女の子らしさ」の特性として同じカテゴリに属すと考えられるものを分類するために付したものである。

るものの順で、「男の子らしさ」「女の子らしさ」の特性を認めるということは、文化的社会的性差であるジェンダーを同様の順で容認していることにもなるのである。性役割観尺度とジェンダー概念把握のあいだにも明らかな有意差が見られたことになる。このことから、伝統的性役割観を内面化しているものは、ジェンダーを自然なものであると考えている。伝統的性役割観を内面化しているものほど、ジェンダーに関しての問題意識が低いと考えられる。

そして、伝統的性役割観を内面化しているものほど、「男の子らしさ」「女の子らしさ」というイメージ・モデルを明確に有している。故にこれによって「男の子らしさ」「女の子らしさ」に基づくしつけというものを展開しているのではないだろうかとの仮説が生じてくる。伝統的性役割観を内面化している保護者ほど他の保護者より、ジェンダーの再生産により関わっているのではないかと考えられるのである。

#### 6) 性役割観尺度と男女によるしつけのちがい

伝統的性役割観を内面化している保護者ほど、「男の子らしさ」「女の子らしさ」に基づくしつけというものを展開しているのではないだろうかという仮説を検証するために、「子育てをする上で、男の子と女の子のしつけを変えることがありますか」という設問を行った結果が表12である。

伝統的性役割観を内面化しているものは54.8%、中間

的なもので36.9%が、流動的性役割観を内面化しているものは24.0%が「男の子」「女の子」によりしつけを変えると回答している。性役割観尺度と性差によるしつけ方の違いのあいだには明らかな有意差が見られた。伝統的性役割観を内面化しているものは、中間的性役割観を内面化しているもの、流動的性役割観を内面化しているものに比して、「男の子」「女の子」の違いに応じてしつけを変えるのである。

アスキーら（1997）によると、女の子には男の子よりも多くのことを話しかけたり、ブルーの服や自動車のおもちゃは男の子に、ピンクの服や人形は女の子に与えるというのはよく見られる現象である<sup>(9)</sup>。「男の子のくせに泣くのではありません」「女の子のくせに」といった発言を誰しもが耳にしたことがあるであろう。保護者達は自分が思うところの「男の子」「女の子」的性質・性格・行為を子ども達に求めるのである。

それでは、具体的にどのように「男の子」「女の子」により、しつけを変えるのであろうか。『「男の子」に必要なしつけ、「女の子」に必要なしつけは何ですか』という設問を行った。自由記述でえた代表的な結果を示したもののが表13である。

「男の子」には、元気で、快活でありながら、自分よりも弱いと考えられる存在への配慮を求め、容易には泣かない、我慢強さ等を期待している。また「女の子」には、他の人への心配り、行儀のよさを期待しているのである。言葉遣いの良さ等に代表されるように、「男の子」

表12：性役割観尺度と男女によるしつけのちがいについてのクロス表

	ある	ない	合計
伝統的	54.8(120)	45.2 (99)	100.0(219)
中間的	36.9 (41)	63.1 (70)	100.0(111)
流動的	24.0 (54)	76.0(171)	100.0(225)
$\chi^2 = 44.536 \quad df=2 \quad p < 0.001$			

表13：「男の子」「女の子」に求めるしつけ

男の子に求めるしつけ	元気さ・快活さ・活発さ (a) 弱者（女の子）に対する配慮 (b) 言葉遣いの良さ (c) 男の子らしい趣味・嗜好・特性 (d) 我慢強さ・泣かない (e) 未知の対象へのチャレンジ・自分の意見を明確に主張する (f)
女の子に求めるしつけ	人への優しさ (A) 行儀の良さ・性的な露出を避ける・立ち居振舞いの美しさ (B) 言葉遣いの良さ (C) 女の子らしい趣味・嗜好・特性 (D) 家事の手伝いへの参加 (E) 努力する (F)

「女の子」に共通するしつけも存在するが、「男の子」には自らの意見を明確にするチャレンジ精神的なもの、「女の子」には家事の手伝いをする等のジェンダーにとらわれたと考えられるしつけの方が、多く存在する。

そして「男の子」に求めるしつけ、「女の子」に求めるしつけは、「男の子らしさ」「女の子らしさ」のイメージ・モデルに対応するものであると考えられる。例えば、表13の男の子に求められる元気さ・快活さ・活発さ (a) は、表11における力強い (a) ・たくましさ (a) ・活発 (a) ・大胆さ (a) に対応するものであるし、女の子に求められるしつけの、人への優しさ (A) は、表11における優しさ (A) ・小さな気配り (A) と対応するものである。

このように「男の子」「女の子」に求められるしつけは、「男の子らしさ」「女の子らしさ」に基づく、換言するならばジェンダーにとらわれたしつけであると考えられる。保護者は、「男の子」には「男の子らしい」と保護者が考えているモデルをしつけとして子どもに求めているのである。同様に「女の子」には「女の子らしい」と保護者が考えているモデルをしつけを通して子どもに求めているのである。そしてその傾向は、伝統的性役割観を内面化しているものほど強く、伝統的性役割観を内面化しているものほど「男の子らしさ」「女の子らしさ」に基づくしつけというものを展開している。すなわち家庭におけるジェンダーの再生産に寄与していると考えられる。

## V まとめ

本研究からわることは以下のとおりである。

1. 性役割観尺度と自らが受けたしつけ、また子どもへのしつけの厳しさには関連が特に見られない。
2. 伝統的性役割観を内面化しているものは、他のものに比してジェンダーを容認する傾向があり、しつけもジェンダーの再生産をうみやすい傾向にある。

1に関しては、しつけは性役割の教え込みという側面を有しているので、直接保護者から厳しいしつけを受けたものが、伝統的な性役割観を内面化するという傾向にあるのではないかという仮説構築を行っていた。しかし、今回の質問紙調査からはそのような傾向は、見られなかった。また、伝統的な性役割観を内面化しているものが、わが子のしつけに関して厳しいという傾向も、特には見ることができなかった。性役割観尺度と保護者自身が客体となって受けたしつけ、保護者自身が主体となって行うしつけの間には顕著な関連は見られなかった。ただし、しつけの客体として保護者から厳しくしつけられたものと、しつけの主体としての子どものしつけに関しては、関連性があると思われる。しつけの主体と客体の間とい

う意味では、しつけの再生産が見られるのである。

2に関しては、伝統的性役割観を内面化しているものは、ジェンダーを他のものより容認する傾向がある。つまり、「男の子らしさ」「女の子らしさ」という存在をめる傾向にあるのである。そして、「男の子」には、強さ・たくましさ・活発さに代表される特性があるとえ、「女の子」には優しさ・小さな気配り・奥ゆかし等の特性があると考えている。それ故、言葉遣いのように男女共通に求められるしつけもあるが、「男の子」は弱者(女の子)に対する配慮・未知の対象へのチャレンジ・我慢強さ等を求め、「女の子」には行儀の良さ家事の手伝いへの参加等の性差によるしつけの違いをめるのである。伝統的性役割観を内面化しているもの「男の子らしさ」「女の子らしさ」に基づくしつけ、ジンダーに基づくしつけを行う傾向にあるといえる。そしてそのことが、ジェンダーの再生産に大きく寄与することとなる。

家庭におけるジェンダー形成過程は、保護者を代表する家族と子どもの相互作用において、具体的には、しつけという名目で行われている。そのしつけは保護者性役割観尺度と関連をもって行われているのである。統的な性役割観を有する保護者は、伝統的なしつけを視し、子どものジェンダーに基づき「男の子らしい」「女の子らしい」しつけを子どもに求めるのである。これが子どものジェンダーの形成・再生産にも影響を及ぼしていると考えられる。しつけという言葉の一般的な解の中には、かなり長期にわたる性役割の教え込みという意味合いを有するが、特に、幼児期のしつけはジェンダー形成にとって大きな影響を及ぼすものであることからこの意味は重大である。家庭においてもしつけとい名目の下、ジェンダーの再生産は行われており、伝統性役割観を内面化しているものにその傾向が高いといことが、本研究から導き出される結果である。

しつけに関して、問題になるのは、このような差異処遇が子どもによる性別の自覚に先立って行われるのである。その結果、能力や興味の分化にまで影響を与え個性の類別的操作性の問題となる。家族のなかでこのような性差が作り出され、学校がそれを助長していくの、資本主義がその維持・持続のために階級関係の再生産同時に性別分業の再生産をも必要としているからである。このことにも注意を払っていく必要があると考えられる。

## 註

- (1) 木村涼子『学校文化とジェンダー』勁草書房、1995年、pp.25-40.
- (2) 森繁男「幼児教育とジェンダー構成」竹内洋他『教育現象の社会学』世界思想社所収、1995年

pp.132-149.

- (3) 竹内利美「しつけ」日本民族学協会編『日本社会民族辞典』第二巻, 誠文堂新光社, 1954年.
- (4) 森繁男「性役割の学習としつけ行為」柴野昌山編『しつけの社会学』世界思想社所収, 1989年, pp.156-157.
- (5) 有地亨『日本人のしつけ』法律文化社, 2000年.
- (6) 清水義弘『子どものしつけと学校生活』東京大学出版会, 1983年.
- (7) 中西祐子『ジェンダー・トラック』東洋館出版社, 1998年, pp.54-56.
- (8) 中西祐子『同上書』東洋館出版社, 1998年, p.37.
- (9) スー・アスキュー&キャロル・ロス著/堀内かおる訳『男の子は泣かない』金子書房, 1997年, Sue Askew&Carol Ross, (1988), Boys Don't Cry., p.12.